

子どもの本

研究会

私の一冊

漱石「草枕」をどうぞ

和田正隆

漱石が明治29年(1896)五高教師として熊本に赴任したのはご存知の通り。4年3か月を過ごしたのち、ロンドン留学のため旅立ちます。ちなみに昨年は来熊120年没後100年、今年が生誕150年のメモリアルイヤーです。熊本では漱石は玉名の小天温泉と阿蘇を訪ねています。その時の体験で小説「草枕」と「二百十日」が生まれました。

熊本にゆかりの深い「草枕」をぜひ読んで頂きたい。とても難しいです。でもじっくり時間をかけて辞書を引き、古書と突き合わせながら読むと、なかなか面白いです。彼自身が紹介しているように、「草枕」にはきっちりした筋立てがなく、話がどう進んでいくかわからない、ですから彼は、どこから読んでもいいよ、というのです。

ある絵描き(画工)が熊本から島崎、鎌研ぎ坂を経て小天温泉へ、そこでのいろいろな出来事が書かれている。絵描きは人情の世界つまり嬉しい悲しい辛い羨ましいなどは面倒くさい飽き飽きしたといって非人情(不人情ではない)の世界・桃源郷を求めていくのです。そこで寄宿先の娘・那美を知ります。珍妙奇妙な会話が織りなす雰囲気は思わず笑ってしまいます。漱石の面目躍如というところでしょうか。でも最後に人情の世界にこそ真実はあるのかな、と思わせるシーンで終わります。

ところが漱石の全作品にはすべてに社会批判が満ちています。彼が忌み嫌った権力者、金満野郎、西洋かぶれ、そして人間のエゴ・虚栄です。「坊っちゃん」も「虞美人草」以降も男女の三角関係を描きながら彼自身の気持ちをおぼちまけています。そういうつもりで読むと何だか親しみがわきませんか。「草枕」には、「・・・世の中はしつこい、こせこせした上ずうずうしい。人のひる屁を後ろから勘定している・・・」などのセリフが、また「二百十日」では主人公が「華族、金満家など文明の怪物を打ち殺して金も力もない平民に安慰を与えることが我々の目的だ・・・」と息巻きます。漱石をまた違った視点から読んでみるのもいいでしょう。ぜひ挑戦してください。

(くまもと漱石倶楽部 会長)